「飛ばないナミテントウ」の効果的な使用法

害虫が多発生してからの天敵放飼は効果が低い。アブラムシ防除に利用できる新しい天敵「飛ばないナミテントウ」も同様である。そこで、気門封鎖型殺虫剤※を散布することでアブラムシ密度を一時的に減少させ、その後に飛ばないナミテントウを放飼することで防除効果を安定させる技術を紹介する。

内　容

テントウムシはアブラムシの有力な天敵であるが、「飛ぶ」ことでほ場に定着し難いという欠点があった。「飛ばないナミテントウ」は定着性がよいため、様々な栽培場面において高い効果が期待される。

研究成果として、施設イチゴのアブラムシ防除では、飛ばないナミテントウ幼虫10頭／m²の放飼に対し、アブラムシ密度が株当たり50頭以下の条件で効果が高いことを明らかにしている。逆に、アブラムシがそれ以上増えた状態では効果が期待できない。ということは、放飼タイミングを逃すと飛ばないナミテントウは使えない天敵になってしまうのだろうか？そこで、気門封鎖型殺虫剤※の散布により、効果のある密度までアブラムシを一時的に減少させ、その後、飛ばないナミテントウを放飼することで防除効果を得る技術を実証した（図）。気門封鎖型殺虫剤は、飛ばないナミテントウへの影響が小さい。この技術により、アブラムシの発生密度に対し幅広く飛ばないナミテントウの利用が可能になる。

「飛ばないナミテントウ」とは！？

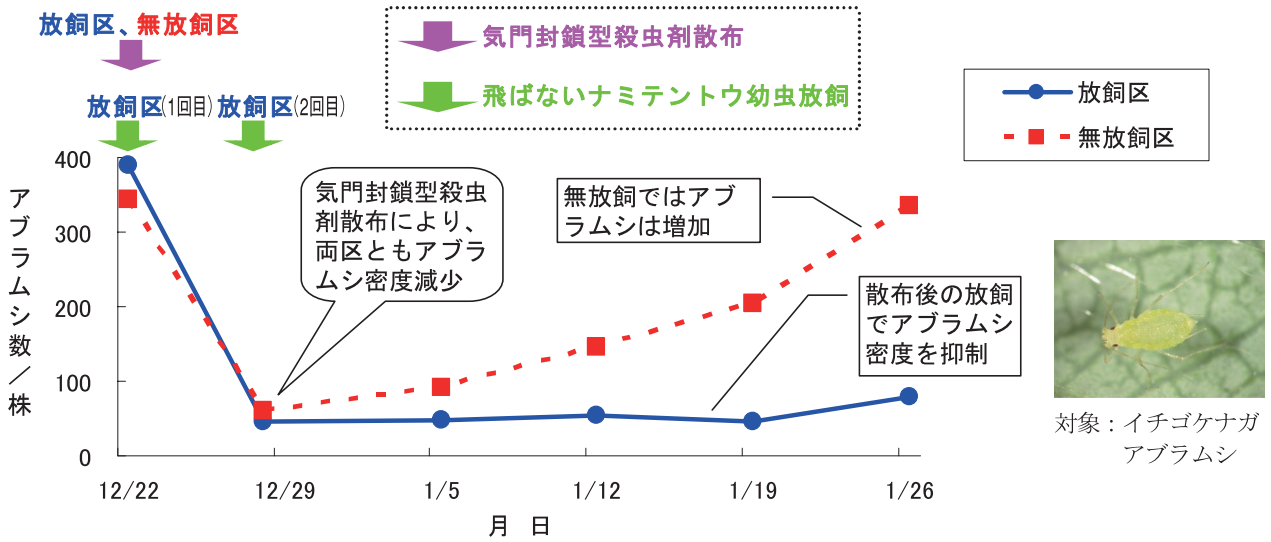
- 外見上は普通のナミテントウと同じ
- 成虫、幼虫ともアブラムシをよく食べる
- 飛翔しないため、ほ場に定着しやすい
- 近畿中国四国農業研究センターが系統選抜

今後の方針

気門封鎖型殺虫剤は、直接虫にかからないと効果がない。葉裏までしっかりと薬剤をかける必要がある。飛ばないナミテントウは、2012年春に農薬登録される見込みである。化学農薬に替わる新しい防除手段として、有効利用されることに期待する。

田中　雅也（環境・病害虫部）
（問い合わせ先　電話：0790－47－1222）

※虫体への付着性の高い液体で気門（呼吸器官）を覆うことで害虫を防除する殺虫剤



対象：イチゴケナガアブラムシ

気門封鎖型殺虫剤散布後の「飛ばないナミテントウ」幼虫放飼によるアブラムシ防除